

大妻精神の継承と具現

—聞き取り調査を通じ大妻の教え・学びを探る 1—

Devolution and realization of Otsuma spirit
Through interview survey-looking for our Otsuma's mind, telling and way

高垣 佐和子¹, 井上 小百合², 里見 脩³, 上田 香十里²
Sawako Takagaki¹, Sayuri Inoue², Shu Satomi³, and Katori Kanda²

¹大妻女子大学博物館大妻コタカ・大妻良馬研究所, ²一般財団法人大妻コタカ記念会,
³大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科

キーワード : 大妻コタカ, 大妻精神, 聞き取り調査

Key words : Kotaka Otsuma, Otsuma spirit, Interview

1. 研究目的

大妻学院は 2018 年に創立 110 周年を迎え, 2020 年には学祖大妻コタカ先生没後 50 年を迎える。大妻コタカ先生の遺した業績及び建学の精神を次世代へ継承していくことは大妻学院として極めて重要である。申請者らはこれまで卒業生対象の座談会やアンケート調査等により大妻コタカ先生から受けた直接的な教え, また大妻での学び・教えなどを同窓会誌^{[1][2]} 他で明らかにし, 大妻精神を顕彰してきた。

本研究では卒業生及び大妻コタカ先生と交流のあった方々に対し, 大妻コタカ先生から受けた直接的な教え, 大妻での学びの様子, 寮生活の様子, 卒業後の経験等々を聞き取り, 大妻コタカ先生の遺された大妻精神の継承と具現を顕彰することを目的としている。

2. 研究実施内容

一般財団法人大妻コタカ記念会及び大妻地方同窓会の協力を得て卒業生及び大妻コタカ先生と交流のあった方を紹介いただき, 地元へ赴き聞き取り調査を実施。

調査は 4 回実施し次に時系列で示す。

(1) 2016 年 5 月 25・26 日大妻同窓会関西の協力のもと, エクシブ有馬離宮 (兵庫県神戸市北区有馬町 1661-11) に於いて, 昭和 32~55 年卒業の 11 名からグループ形式で一人ずつ聞き取る方法で実施。

(2) 2016 年 7 月 2・3 日大妻同窓会広島・世羅

の協力のもと, 大妻コタカ先生生家 (広島県世羅郡世羅町川尻 914-1) 及びメルパルク広島 (広島県広島市中区基町 6-38) に於いて, 大妻コタカ先生の親戚関係にある男性 3 名, 昭和 30 年代大妻コタカ先生と共に大妻先生宅に居住し大妻で学んだ方及び大妻先生宅に隣接する学院寮に住み給費生として大妻に学んだ方 6 名から座談会方式による聞き取り調査を実施。

(3) 2016 年 7 月 25 日大妻同窓会愛知の協力のもと, 名鉄グランドホテル (愛知県名古屋市中区村区名駅 1-2-4) に於いて, 昭和 18~49 年卒業の 12 名からグループ形式で 1 名に, 他 11 名からは一人ずつ聞き取る方法により実施。

(4) 2017 年 3 月 3・4 日大妻同窓会広島・世羅及び世羅町教育委員会の協力のもと, 世羅町立せらびがし小学校 (広島県世羅郡世羅町川尻 1987-2), 世羅町立甲山中学校 (広島県世羅郡世羅町西上原 1469-1), 世羅町太田庄歴史館 (広島県世羅郡世羅町大字甲山 159) に於いて大妻コタカ先生縁の方々から地域のことを聞き取る調査を実施。

3. まとめと今後の課題

当初聞き取った内容を (1) 大妻での学びの様子 (2) 寮生活の様子 (3) 卒業後「教員」として勤務した経験の中からの 3 点の大項目を掲げて顕彰することとしていたが, 今回の聞き取り調査において教員として長く勤務された方が無かったため「大妻コタカ先生と直接関わって」という項目に変更して顕彰することとした。

(1) 大妻での学びの様子

聞き取った内容を大妻で学んだ時代別に分けて示す。

①昭和 30 年代の学びから

授業では課題が多く、手が遅いために徹夜をして作品を仕上げるが多かった。運針の針の運びも出来ないところから始め、浴衣を制作し、自作の浴衣を着てモデルのように歩き、きれいに仕上がりましたねと先生にほめられて嬉しかった。自信がついた。

苦心した作品が一つ一つ出来上がるのは楽しみになっていった。そして、学生時代苦心して作った作品は今でも大切にしている。

大妻の教えは実技の重要性であり頑張ればちゃんとできるようになるという証であった。

②昭和 20 年代の学びから

校舎内にあった学内寮で生活をしていたが、和裁の課題が分からず消灯後、同様に学内寮に住んでいた先生から指導を受けることができた。

その甲斐があり、結婚後親戚や近所の方から浴衣の縫製や着物の袖のお直しなど依頼され大妻の教えが役に立った。

③昭和 10 年代の学びから

昭和 11 年完成の校舎は鉄筋 5 階建てで当時の女学校としては非常に珍しかった。

校舎の随所に大妻コタカ先生の生徒に対する細やかな配慮がなされていた。そのひとつは教室の暖房機の上に戸棚が設えてあり、冬場その棚でお弁当を温めることができた。

ふたつ目は身体が冷えないように教室の椅子にはフェルトが貼られていた。そしてその椅子を汚してしまうとさり気なく布を裏返すなどの修繕が直ぐされていた。さり気なく修繕されることは生徒にとって安心であった。

昭和 15 年頃の生理用品は現在のようにナプキンとして発達しておらず脱脂綿であった。以下引用する。神崎 (1939) は「女学校ものがたり (山崎書店)」の『コタカ女史 大妻技芸学校』の項で次のようにいっている。「水掃式の便所は生徒が綿を流しても詰まらないように、三吋 (インチ) の太いパイプを使ってある・・・」

なお同書には「廊下の隅は丸くなっていて、箒の先が塵を残さない」ともある。このように大妻コタカ先生の細やかな配慮は学外者にも知られるものであったことが伺える。

戦時中、校舎の屋上階には陸軍の通信隊が居た。

敵機が大島上空に来ると「つばき、つばき」、三浦半島から九十九里浜へ向かっている時は「とっくり、とっくり」という暗号が校内放送で流され授業は中断された。

当時の大妻高等女学校の制服は三角襟のセーラー服だったが三角襟が好きでは無かった。家政学院の制服はマントで、とても素敵でうらやましかった。

(2) 寮生活の様子

寮生活は総じて慣習風習が違う同士の集まりの中で視野を広げることができる人間修養の場で、寮生活得た人間関係は人生の宝物である。具体的には我慢強くなる、人の嫌がることを率先してすることの大切さを学ぶ、人の痛みの分かる人となる、規則正しい生活が身につく、人間関係を尊重し上下関係を学ぶ、誰とでも仲良くできるようになるなど。

寮生活では毎日手紙を書くように大妻コタカ先生から教えられ、手紙を書く習慣がついた。手紙は受け取る相手のことを常に思うあたたかさがあり、それが大妻精神だった。

寮には「ごきげんよう」の挨拶、上級生を「お姉さま」、大妻コタカ先生を「お母さま」と呼ぶ習慣、大妻文化があり、最初は馴染めなかった。

大妻コタカ先生は入学時、夏休み前、姉妹会、クリスマス会、送別会などの寮のイベントの折に来てくださり講話をされた。

寮祭 (姉妹会) では逆立ちの隠し芸をされ、ユーモアのセンスに感心した。いつもにこやかで優しい先生で、お話しがとても上手であった。

大妻コタカ先生から直接教えていただいたことは、全て真心のこもった手作りの大切さ、ケチと無駄遣いの違い、質素儉約の心の大切さ、賢さより利発になるように、恥を知れ、らしくあれ・らしくありたい、控えめ、目上の人をたてる、助言はするが行動するのは貴女自身ですから頑張ってくださいよ。

(3) 大妻コタカ先生と直接関わって

昭和 30 年代大妻校内に居住し、大妻コタカ先生と関わった方々の聞き取り内容を示す。

大妻家には来客が多かった。大妻コタカ先生は戦争中に痛められ足が悪かったが、必ずご自分で来客を迎えられていた。どんな人が来ても対応が変わらなかった。

大妻コタカ先生は権威ぶったり偉そうなことを言う人ではなかった。世の中は権威があるから偉

いわけではないと仰っていた。

甲山町立の技芸学校の校長を頼まれてやっていたが、その学校のため宮沢喜一さんや池田勇人さんなどの東京に住む広島県人会の人の所に頭を下げて寄附集めに出かけるのに同行した。足が悪いのに精力的に出かけ、郷里を思う気持ちの篤い人だった。

大妻コタカ先生宅に招かれてお食事をするこゝろがあった。みかんの皮、葡萄の房もゴミに棄てないで最後まで活かすようにと教わった。

在学中に良馬先生の 50 年祭があり、来場者のために一口でいただけるおにぎりを作ったが、コタカ先生の考案でミカンの皮を細かく刻んでおにぎりに混ぜた。おにぎりにミカンとは考えつかないことで発想が素晴らしかった。また、おにぎりも一口でいただけるサイズで、召し上がる人のことを考えてのことであった。

大妻の教えは世の中に求められた時、みんなの力になる、縁の下の力持ちになれることを教わった。卒業後会社員となり大妻の教えであるみんなの力になることを実践した。すると勤務した会社で採用する新入社員は次々と大妻の卒業生が採用された。大妻精神が社会に歓迎された証であった。

専業主婦となった方は、その場で与えられた PTA や地域社会の場面で社会貢献をされている方が多くいると話してくれた。

聞き取り調査をした多くの方が定年退職後も新しいことにチャレンジし学び続け、ボランティア

活動をしていた。大妻コタカ先生の説いた「いつになっても学んでいくことの大切さ」を実践されていた。

卒業生が社会・家庭で歓迎されているのは、卒業生の身についた大妻精神がそれぞれの活動の場において力を発揮していることによる。

大妻コタカ先生に関する調査は継続し出来るだけ多くの方からの聞き取り調査が必要である。また、学生時代の作品・授業ノートを提供いただき時系列的に大妻の学びを整理し、大妻の学び・教えを具現する必要がある。

4. 参考文献

①雑誌論文

[1]「高垣佐和子・井上小百合他」「大妻狭山台校 私たちの記憶」「法人設立 40 周年記念誌」「査読無」「2016」

[2]「高垣佐和子・井上小百合」「戦時下の大妻」, 「ふるさと」「査読無」「67 号」「2015」「54 頁～60 頁」

②図書

[1]「神崎清」「女学校ものがたり」「山崎書店」「1939」「118 ページ」「コタカ女史 大妻技芸学校」

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の助成 (K2805) を受けたものである。